

宮本常一

みやもと つね いち

周防大島町
(1907～1981)



【著作】

『宮本常一著作集』51巻（昭和43／平成24・未来社）
『私の日本地図』全15巻（昭和42／昭和51・同友館）
『民具学の提唱』（昭54・未来社）ほか

【閲覧情報】

宮本常一に関する文書、写真、図書などの資料は、
周防大島文化交流センターに所蔵されており、セン
ター内で閲覧できる。また、写真資料の一部と書誌
情報は、宮本常一データベースでも公開されている。
・宮本常一データベース
URL：http://www.town.jp/database/

周防大島出身の民俗学者。生家は農業・養蚕を営み、宮本も幼少期から田畑に通い、浜辺に遊び、寝物語に土地に伝わる昔話を聞いて育つ。この幼少期の経験が後の宮本民俗学の基礎となったと言われる。

文学を志して大阪に出た後、郵便局勤務を経て、天王寺師範学校に学び小学校の教員となる。初期には「三島郵便局員」などの小説の執筆や和歌の創作を行っているが、生前は世に出ることはなかった。

この頃、雑誌『旅と伝説』に故郷の民間伝承などを紹介した「周防大島」を連載。柳田國男の知遇を得て本格的に民俗学の道に進む。そして生涯の師となる渋沢敬三に出会い、アチックミューゼウム（のちの日本常民文化研究所）に入所。全国を旅して庶民生活の実情を記録し数多くの著作を記す。

戦後は九学会連合調査・山村林業金融調査・漁業制度資料調査をはじめ各種の学術調査に参加。農山漁村の振興にも取り組む。特に離島問題には情熱を傾け、離島振興法の制定（一九五三年）や全国離島振興協議会の運営にも尽力した。島の現況と課題をまとめた『日本の離島』はエッセイストクラブ賞。

雑誌『民話』、『日本残酷物語』などの編集・執筆に携わり文学者らとの交友も深める。『民話』連載の「年寄りたち」を中心に編まれた『忘れられた日本人』は、名も無き人びとのライフストーリーをもとに地域の生活構造を明らかにした作品で、「語り」の文体を採用するなど多方面から高い評価を得ている。

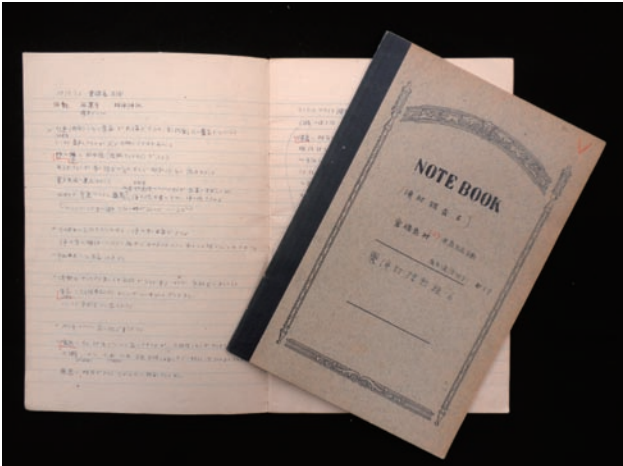
昭和四十年（一九六五）から武蔵野美術大学教授に就任し、生活学・民具学の分野の発展に寄与する。また近畿ツーリストの社内組織として発足した観光文化研究所では所長を務め、旅をテーマにして後進の育成に力を注いだ。

また周防猿回しや行波神楽といった山口の伝統芸能の復興・継承活動にも協力。周防大島では『久賀町誌』『東和町誌』の編纂に携わり、生活文化の継承を目的に民具収集を指導した。最晩年には東和町郷土大学を設立し、故郷の未来を担う人材の育成に努めた。

（文・高木泰伸）



宮本もかつて遊んだ生家の前の干潟。奥に見えるのは真宮島。昭和36年4月。宮本常一撮影。カメラを用いてふるさとの暮らしを記録しつづけた。
（提供：周防大島文化交流センター）



宮本常一が旅先でつけた調査ノート。漢字・カタカナで記されたノートは現在ボランティアの人びとにより翻刻され、周防大島文化交流センターから刊行されている。
（提供：周防大島文化交流センター）

「あんたはどこかな？ はア、長州か、長州かな、そうかなア、長州人はこのあたりへはえつときておった。長州人は昔からよう稼いだもんじゃ。このあたりへは木挽や大工ではたらきにきておった。大工は腕ききで、みなええ仕事をしておった。」

ときにあんたは何が商売じゃ？ 「百姓じゃといなさるか、百姓じゃアあるまい。ものいいがらがう。商人じやないのう。まア百姓でもええわい。わしの話をききたいといいなさつても、わしは何にも知らんじや、何にもなア。ばくろうしておったから牛や馬のことなら知つとる。しかしほかのことは何にもならん。どうして盲目になったといなさるか。盲目にのう、盲目になって、もうおつつけ三〇年がくる。極道したむくいじやよ。まア、ずいぶん極道しよつたのでう。極道がすぎて、まともな暮らしもようせなんだ。あんたは女房はありなさるか。女房は大事にせにやアいけん。盲目になつても女房だけは見捨てはせん」

いろりには火がチロチロもえていた。そのそばに八〇をかなりこえた小さい老人があぐらをかいてすわっている。いちじく形の頭をして、齒はもう一本もなくて頬はこけている。やぶれた着物の裾もろくに見えないほどよこれている。ここは土佐の山中、橋原村。そしてこの老人の住居は全くのち食小屋である。ありあわせの木を縄でくくりあわせ、その外側をむしろでかこい、天井もむしろで張つてある。そのむしろが煙でまっくらになつてゐる。天井の上は橋。つまり橋の下に小屋がけしつてゐるのである。土間に初がらをまいて、その上にむしろをしいて生活している。入口もむしろをたれたまま。ときどき天井の上を人の通つていく足音がきこえる。寒そうな急ぎ足である。

「土佐源氏」『忘れられた日本人』（宮本常一著作集10 未来社）より

宮本常一 年譜

（提供：高木泰伸）

明治40（一九〇七）年	一七歳
大正13（一九二四）年	一七歳
大正15（一九二六）年	一九歳
昭和2（一九二七）年	二〇歳
昭和3（一九二八）年	二二歳
昭和4（一九二九）年	二二歳
昭和5（一九三〇）年	二三歳
昭和6（一九三一）年	二四歳

8月、大島郡家室西方村（現・周防大島町）に生まれる。
高麗橋郵便局に勤務。
4月、天王寺師範学校二部入学。
3月、天王寺師範学校卒業、大阪府泉南郡有真香村修斉尋常小学校に訓導として赴任。
4月、天王寺師範学校専攻科入学。
3月、天王寺師範学校専攻科卒業、大阪府泉南郡田尻尋常小学校に訓導として赴任。
『旅と伝説』3・1（柳田國男編）に周防大島の民間伝承を記した「周防大島（1）」が掲載。
3月、大阪府教員を退職して、病氣療養のため帰郷。周防大島の昔話・伝承などの採訪を行う。12月、周防大島昔話話集を整理し、柳田國男へ送る。柳田よりの返書来る。

昭和7（一九三二）年	二五歳
昭和9（一九三四）年	二七歳
昭和10（一九三五）年	二八歳
昭和14（一九三九年）	三二歳
昭和17（一九四二年）	三五歳
昭和18（一九四三年）	三六歳
昭和20（一九四五年）	三八歳
昭和21（一九四六年）	三九歳
昭和23（一九四八年）	四一歳
昭和24（一九四九年）	四二歳
昭和25（一九五〇）年	四三歳
昭和27（一九五二年）	四五歳
昭和28（一九五三年）	四六歳
昭和33（一九五八年）	五一歳
昭和34（一九五九年）	五二歳
昭和36（一九六一年）	五四歳
昭和38（一九六三年）	五六歳
昭和39（一九六四年）	五七歳
昭和41（一九六六年）	五九歳
昭和44（一九六九年）	六二歳
昭和50（一九七五年）	六八歳
昭和52（一九七七年）	七〇歳
昭和55（一九八〇）年	七三歳
昭和56（一九八二年）	七三歳

大阪府泉北郡池田尋常小学校に代用教員として赴任。
3月、泉北郡陽徳尋常小学校に転任。10月、京都大学で講演をする柳田國男に招かれ、関西在住の民俗研究者を教えられる。
2月、泉北郡取石小学校に転任。4月、大阪民俗談話会で渋沢敬三と出会う。
10月、小学校を退職し、上京。アチックミューゼウムに入所。11月、中国山地民俗採訪調査。以後、昭和17年まで民俗調査のため全国各地を訪ねる。
アチックミューゼウムが日本常民文化研究所と名称変更。
帰阪して、奈良県立郡山中学校嘱託。
4月、郡山中学校退職、大阪府嘱託として生鮮野菜受給対策を立てる。7月、堺空襲にあい、家財・書籍・資料一切を焼失。
帰郷して農業に従事。
大阪府農地部農業組合課嘱託。
日本常民文化研究所復帰。農林省水産資料保存委員会調査員、主として瀬戸内海漁村の調査・文書収集にあたる。
八学会連合対馬調査に参加。民族学班に配属され主として漁業調査を行う。翌26年から九学会。
九学会連合能登調査、社会学班。
5月、離島振興法制定。全国離島振興協議会幹事、翌年7月事務局長。12月、全国離島振興協議会機関誌『しま』刊行、編集・執筆を精力的に行う。
雑誌『民話』創刊。編集員、「年よりたち」を連載。
九学会連合佐渡調査。『日本残酷物語』刊行開始。
6月、『日本の離島』によりエッセイストクラブ賞受賞。
12月、『瀬戸内海島嶼の開発とその社会形成―海人の定住化を中心に』により東洋大学から文学博士号授与。
九学会連合下北半島調査。
4月、武蔵野美術大学非常勤講師、翌年より教授（52年3月まで、同年名誉教授。民俗学・生活史を講義。
1月、日本観光文化研究所設立。当初は近畿ツーリスト資料室、4月より研究所が正式名称。
離島振興審議会委員。
日本民具学会設立、同会幹事。
4月、周防猿まわしの復活に協力。12月、『宮本常一著作集』（第一期）により今和次郎賞（日本生活学会）受賞。
東和町郷土大学発足「郷土の歴史」を講義。
1月、逝去（享年73才）。勲三等瑞宝章。

※田村善次郎「宮本常一略年譜」（宮本常一―同時代の証言・続）マツノ書店2004年）より作成。